

3) 出土遺物

遺物は、杉土手積土層中と旧表土層中から縄文土器と石器が出土している。

縄文土器は全て小破片で、表面が摩滅しているものが多い。文様のある破片のうち7点を図化した（第37図）。1は3条の平行する細隆帯で縦・横の区間と、その間を弧状に充填する模様を描く。2は直立する厚手の口縁部の破片で、へらによって横位の「ハ」字状の連続刺突文を描いている。3は強く外反する厚手の口縁部の破片で、半裁竹管による2段の押し引き連続刺突文がある。4は緩く外反する比較的薄手の口縁部の破片で、半裁竹管による横位・斜位の押し引き連続刺突文がある。5は半裁竹管による平行沈線の幾何学文様がある。6は端部が内湾する口縁部の破片で、口唇直下に横位沈線が1条引かれ、その線から横に連続して展開する縦位沈線による模様がある。7は、LR縄文を切って縦にのびる4条の平行沈線文がある。これらの縄文土器のうち、1～6は、1次調査の際に土坑等からまとまって出土した縄文時代前期末の土器群と同期のものと考えられる。また、7については中期中頃の土器と判断される。

石器は、図化した2点と、SK-1から出土した剥片のほか、積土と旧表土層からも各1点の剥片が出土している。8はSK-1から出土したスクレイパーで、側面の片側の基端部寄りがやや抉られており石匙のような形態をとる。9は片側の側縁に2次加工のある縦長の剥片である。旧表土中から出土している。

9 調査成果のまとめ

1) 杉土手の構築年代について

杉土手の構築年代について、北前遺跡1次調査においては、土手を切る溝からの出土遺物によって、江戸時代中期以前と推定されている（注1）。さらに杉土手1次調査においては、

1. 『伊達治家記録』に仙台開府以来行われた山追いに際して、鹿除土手が必要と考えられるので、開府当時構築された。
2. 杉土手頂面にある杉の古株と同等の直径の杉の年輪測定結果と、戦時中の伐採記録にある年輪（240～300年）から、寛永の新田開発の頃に構築された。
3. 古地図に描かれた杉土手が、元禄10年開山の大年寺惣門に切られているように描かれていることから、元禄10年以前に構築された。
4. 『伊達治家記録』に文政のころから山追いの獲物の数が記録されておらず、この頃には鹿・猪が減少し、鹿除土手の必要がなくなっていたと考えられることから文政以前に構築されていた。

という、江戸時代中期をさかのぼる4時期の構築年代が推定され、さらに、土手は2回の補修がなされていることから、長期にわたる使用が考えられている（注2）。杉土手2次調査では、構築年代に係わる新たな資料は発見されなかった。

このような状況にあつて相原陽三氏は、

1. 『仙台藩家臣録』中に、三瓶伝右衛門という侍が鹿除土手の構築に携わった功績により、明暦2年（1656）8月15日に沓貫三百五十九文の知行地を加増されたという記録がある。
2. 仙台市太白区秋保湯本佐勘温泉に伝わる「御山守・湯守佐藤勘三郎家文書」に、御山守をしていた同家に対して明暦2年に、「はけ」と呼ばれる長さ5尺の棒を、鹿除土手の忍び返しの構築のために50荷提出せよという指示文書がある。

ということから、杉土手の構築年代を二代藩主伊達忠宗治世の明暦2年（1656）頃と考察している（注3）。

今回の調査では、杉土手の構築時期にかかわる新たな考古学的資料は発見できなかったが、上記の2つの論考から、構築時期については、明暦2年以前の年代に絞り込むことが可能となった。ただし、相原氏の提示した文献資料につ

いては、杉土手の3期の構築時期のⅠ期に当たるものか、或いはその後の補修整備としてⅡ期またはⅢ期の可能性がないのかの検討が必要と考えられる。Ⅱ期またはⅢ期に係わる場合は、土手の構築年代はさらに逆上る可能性も考えられる。

2) 北前遺跡の調査成果

北前遺跡1次調査区の北側では、縄文時代前期末を中心とする時期の土坑が多数発見されているが、今回の調査で、この時期の土坑がさらに遺跡北東部まで広がっていることが確認された。ただ、今回の調査地点の北側は急な上昇斜面となることと関係するののか、土坑の分布密度は低く1基だけが発見された。

注 記

注1 佐藤 洋（1982）：「北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書第36集』P. 157

注2 小川淳一（1987）：「北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書第105集』P. 25～30

注3 相原陽三（1995）：「鹿除土手の構築について」『仙臺郷土研究』復刊第20巻2号（通巻251号）P. 9～12

参考文献（上記以外）

渡部 紀（1989）：「北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書第129集』

太田昭夫（1992）：「杉土手・北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書第157集』